

Translation and Notes Giovanni Botero, The Reason of State (La ragion di stato), Venezia, 1589, Vol. II, cap.1-10.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41603

翻訳と注解

G・ボッテロー『国家理性論』(1589年ヴェネツィア刊) 第2巻第1章～第10章

石黒 盛久

Translation and Notes Giovanni Botero, The Reason of State (La ragion di stato), Venezia, 1589, Vol. II, cap.1-10.

Morihisa ISHIGURO

【はじめに】

以下に訳出を試みたのは、16世紀後半に活躍したイタリアの政治思想家ジョバンニ・ボッテローの代表作『国家理性論』の第二巻第一章から第一〇章に相当する部分である。筆者は既に本書の序論及び第一巻第一章から第一〇章を金沢大学外国語センター『言語文化論叢』第18号(2014年3月)に、また第一巻第一章から第二章を『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要第』6号(2014年2月)に訳出しているので、本稿と併せてそれらを通読していただければ幸いである。それら先行部分を踏まえこの【はじめに】では、以下訳出する部分の内容に簡単に触れておきたい。第二巻で主に取り扱われるのは、第一巻において君主に求められた美德を具現するための、〈思慮〉(prudenza)と〈能力〉(valore)という二つの徳目の涵養に他ならない。なかでも第二巻の前半をなす本稿では、〈思慮〉の涵養に議論の焦点が据えられている。この〈思慮〉の涵養のため君主には第一に、歴史と地理に通暁することが求められる。こうした姿勢は既に先行するマキアヴェッリの政治観にも窺われる特徴であるが、ボッテローにおける歴史の活用がマキアヴェッリに比して、実例からの帰納という色合いをより強めている点に注目したい。

さてかかる歴史的教養を前提にボッテローは、君主の〈思慮〉の基準が何よりも利益に求められるべきであると断言している。こうした君主における利益の優先の理念こそ、国家理性論の核心をなすものであるが、これから国家を獲得する新君主を対象とするマキアヴェッリの〈思慮〉と、既存の国家の継承者を念頭に置くボッテローの〈思慮〉は、その目的とする利益の内実においてその色合いを若干異にしている。即ち国家の政治行為を規定する運勢(fortuna)と思慮(prudenza)ないしは力量(virtù)との葛藤に関して、前者が力量による運勢の圧倒を志向するのに対して、後者は基本的には所与の運勢を前提にその変動に即応しつつ自身の思慮を貫徹することを企図するのである。実はこうした受動的姿勢はマキアヴェッリがその政治論で最も論難したところのものであり、そのような意味で本章は、よく比較対照して論じられる両者の政治観の差異の本質を測定する上で、最もふさわしい個所といえるだろう。

翻訳・注解

1. 熟慮について

我々はどこで何が名声を増大するかを論じる

ことに移ろう。それには二つの方法がある。即ち熟慮によるものと能力によるものである。この二つの資質は、あらゆる統治がその上に基づけられるべき支柱に他ならない。君主のために熟慮は目として、能力は手として働く。前者が無ければ彼は盲人のようなものであり、後者を欠いては彼は何事もなし得ない。熟慮は助言を提供し、能力は権能をもたらす。前者は命令し、後者は実行する。前者は行為の困難さを察知し、後者はそれを克服する。前者は事案を企画し、後者はそれを具体化する。前者は偉人の判断力を磨き、後者はその心胆を練る。

2. 熟慮を研ぎすます法について

ヴェージェティウスが言う通り、より多くの事柄を心得ることは他の何者にとって以上に、君主にとって適宜なことである¹。彼の博識はその臣下にとり有用であり、また喜ぶべきことでもある。だが〔臣下の〕情操と風俗に関するそれらのあらゆる事柄の認識は、なにかんづく彼自身にとって有用どころか必要なことなのだ。そうした事柄は道徳哲学者たちにより盛んに解明されてきた。また君主にとり、統治法についての知識もまた欠かすことが出来ない。これについては古来より政治家たちが探究している。それというのも道徳は万人に共通する衝動についての認識を与え、政治は臣下のうちに生じる衝動やその効果を沈静したり掻き立てたりする術を教えるからである。また戦争は君主に関わる仕事であるから、君主は軍事事項についての十分な知識をもたねばならない。ここで言う軍事事項についての知識とは即ち、よき将帥についてのあるいは良き兵士についての資質や、彼らを選抜する方法や彼らに隊伍を組ませる方法、彼らを訓練させる方法、そしてまた幾何学、建築学、機械に関わる知識の諸々といった軍事術を司る諸学のことに他ならない²。ユリウス・カエサルはこうした事柄に卓越した士であった。だが私は君主がこうした事柄に、一技師とか一職人のように携われと言っているのではない。君

主として携われと言っているのだ。つまり君主はこうした事柄につき該博な知識を持つとともに、その真偽を、その善悪を判別することを心得、また上申された多くの案の中からより良いものを選択する術を心得るべきなのである。それというのも彼の勤めは、橋や兵器を製造することでも要塞を設計施工することでもなく、これら事柄諸々の専門家が考案するものを適切に利用することに他ならないからだ。

だが平和と戦争の術は雄弁を欠いては役に立たない。雄弁は心情の調合者であり、国家の調整者、人民の調整者である。それゆえ君主は雄弁にも練達していなければならない。ところで、人工物の基礎であるところの自然物についての認識無くして雄弁は、力強いものにも効果あるものにもまた偉大なものにもなり得ない。だから君主は、それについて根拠を以て判断を下し、それについて語ることが出来るほどに、それに精通していることが望ましい。なぜなら世界の状態についての知識は、自然の秩序についての知識は、天体の運行についての知識は、単純体と複合体の性質についての知識は、事物の形成と腐敗についての、魂の本質とその能力についての、草や木の岩石や鉱物の特質についての、動物たちの情操や習慣についての、不完全な混合物の生成についての、雨や霧、雹や霰、雷、雪、稲妻、虹、泉や川や湖や風や地震の、潮の干満その他の海の動きについての知識は、天与の才を目覚めさせ、判断を際立たせ、魂を大事業へと覚醒せしめるからである。アレクサンドロス大王について知られるような国家統治における賢明さも、事業における大胆不敵さもそこから生じてくるし、ペリクレスについて読むことが出来るような論断におけるある種の偉大さもそれに基づいている。実にペリクレスは〔このような力を借りて〕その威名を轟かせ、全ギリシアを支配下に置き、人心に反する物事を極めて人気ある事柄へと変えてしまったのである。この卓越した人物は雄弁を修辞家から学んだのではない。むしろその時代の偉大な哲学者から

学んだのである。君主は我々が彼に要求する事柄の多彩さや多大さに驚愕すべきではない。また彼はその天賦の才や時勢の与える便宜に不信を抱くべきでもない。なんとなれば一私人にとって困難なそして恐らく不可能なことであっても、君主にとっては容易なことだと判断すべきだからである。卓越に達するその他の手法の中にあってもしかるべき一つの方法は、自身の膝下に各専門にわたって希有の人材を置くことである。それは傑出した数学者や哲学者、将軍や兵士、雄弁家たちのことである。君主は彼らから一食卓やその他の場所において一ごく二言三言によって、一般人が学校で何ヶ月かかっても学べないことを学ぶことが出来るだろう。散歩をしながら、騎馬の遠乗りをしながら、あるいはその他の機会においてもこれらの人々に、しかるべき論題を投げかけよ。こうした人々が注目すべき稀な事柄を発言する野心を以て、準備怠りなく常に君主の傍らに群れ集うことにすることにより、彼ら学者たちが不断に刺激を受けているようにせよ。他の者が道化師と時を過ごしている間にこうした賢者と時を過ごすことにより君主は、自身の知性と人民の統治の完成の契機となるような極めて高貴な事柄を学ぶことであろう。アレクサンドロス大王やユリウス・カエサルの永世の功業の虜とならなかった者がいようか。彼らは科学の研究を残しこそしなかったが、剣に劣らず筆にも意を用いたのである。そして彼らは学識において名高い者と時を過ごすことを等閑にすることなく、そこから多大な楽しみを引き出したのであった。カステリア王アルフォンソ 10 世は—その他の学習に加えて、それも自身の多くの政務の間に—聖書を自身の注釈とともに 40 回も読んだと言っている³。フランスのシャルル賢王もアルフォンソ 10 世に劣るものではない⁴。彼の文人に対する好意や聖書研究は、筆舌に尽くしがたいものがある⁵。ナポリ王アルフォンソ 1 世といえば⁶、彼にも増して多事多端だった王はいないほどの人物だが、無学な君主は戴冠した驢馬同

然だと常日頃から言い習わしていた。そして彼の文学に向けた配慮の故に彼は—フランス王フランソワ 1 世と同じく—自身の宮廷とその王国を、各専門分野にわたり卓越した人材で満たしたのである。またトヤヤヌス帝は多大な名声を博した人物であるが、名声を以てまた権威を以て帝国を統治するための箴言を彼に書き送るよう、プルタークに依頼することを恥じ入ることはなかった。そしてその時皇帝はプルタークに、こうした箴言を多彩多様な範例を通じて描き出すことによって、それを喜ばしいものにするようにと付け加えたのである。

3. 歴史について

しかし上記の美德の母たる経験以上に、熟慮を完成した国家の良き統治のために必要なものもない。というのも多くの事柄が密室で悠長に論じられる間に理智の上に基礎づけられながら、いざそれが実践されるとなると成就しないものだからである。多くの物事の実現が一見すると容易に見えながら、実践はそれが不可能といわぬまでも困難であることを明らかにする。さて経験は二つの事柄からなっている。即ち私たちに直接に獲得されるか、しからずんば他人を介してによるかである⁷。第一の場合時と処に関しそれが極めて限定されたものとなることは不可避である。なぜなら直接見聞きしたものから熟慮の精をくみ取らざるを得ないにもかかわらず、一人の人間が色々な場所に存在したり、色々なことを実践することは不可能だからである。いま一つの他人の経験によるものについても二つの種類が認められる。即ち我々は物事を存命中の人物から学ぶか、しからずんば既に亡くなった者から学ぶかだからである。第一の場合は一時間についてさほど長大ではないが一広大な空間を対象とすることが可能である。というのは大使や密偵、商人や兵士、その他同様の人々が—楽しみや商売あるいはその他の偶然から—様々の場所に滞在し、多くの出来事に直面しているため、我々の業務に必要ないしは

有益な数限りない事柄を報告してくれるからである。だがものを学ぶための更に大きな領野は、彼ら書き記した歴史を通じて死者が我々に提供してくれる領野である。というのもこれは世界の全人生と全地域を包含するものだからだ。確かに歴史は人が想像しうる最大の劇場である。そこにおいて人間は他人の労苦により自身に有益な事柄を学び、そこにおいて難破の恐れを感じることなく、戦争の危険に遭遇せず、多様な民族の風俗や多様な国家の制度を出費を要せず眺めることも出来る。またそこにおいて諸帝国の発展と衰退の原理や手段そして目的や原因を察知することも出来る。そしてある君主が静謐に統治を行い別の君主が騒々しく統治するのは何故なのか、ある君主が平和的手段を以て繁栄するのに対し別の君主が軍事力を以て繁栄するのは何故なのか、またある君主が無益に資金を乱費するのに対し別の君主が威厳を以て節儉に務めるのは何故なのか、その理由を学ぶことが出来る⁸。このように歴史の効用には大変なものがあるから、ミトリダテス戦争に派遣されたルクルスは教師が無くとも、過去の事柄について行った学習を通じ、その時代の第一の将帥となりおおせたのである⁹。わがイタリアの事例を述べ立てることを避ければ、トルコ王メフメト2世—この人物こそ「大トルコ」と美称された最初の人物であるが—は間断なく、なにがしか古代の歴史を手にしていたという¹⁰。同じくトルコのセリム1世はアレクサンドロス大王やユリウス・カエサルの事績を読むことを愛好し¹¹、それをトルコ語に翻訳せしめた。その結果彼は彼が行った事業における熱意と迅速さにおいて、この両者に匹敵する者になったのである。

ここで詩を無視してはならない。なぜならアレクサンドロス大王は、ホメロスを読んだことで大いに助けられているからだ。どうしてかと言えば詩人は絵空事を語っているのに過ぎないにもかかわらず魂を覚醒せしめ、こうした絵空事をそれにより礼讃された英雄を模倣しようという、そのような熱意を魂に燃え上がらさず、

しかるべきやり方で彩り鮮やかに描き出しているからだ。そのような訳で伝えられるところによるとペスカーラ侯フェルディナンドは¹²、その青春期に騎士道ロマンの本を読んだことから、彼を後に著名な将帥となすが如き、そのような栄光への欲望に燃え上がったのである。詩人といっても私が語るのは英雄詩人と抒情詩人のことである。彼らはその高雅で威厳ある文体によって—ホメロスやピンダロスそしてヴェルギリウスがしか在った如く—大人物の能力を礼讃したのである。他方詩人中の他の連中はとえば概して彼らの恥知らずぶりや淫乱さによって、詩神を顕彰したりそれに榮譽を捧げるところか、彼女を汚すばかりでしかない。つまり彼らは読者の魂を徳へと目覚めさせる代わりに、むしろそれらに遊惰を教え込んでしまうのだ。

4. 臣下の性行に関する知識について

臣下の本性や才能そして偏向を知ることで以上に、良き統治にとり必要なことはないのであるから、上記のことの徹底的な考察へと戻ることになろう。即ち人々の本性や偏向そして気質は場所、年齢、幸運、教育によって理解されるということである。だが教育については多くの人が、年齢と幸運についてはアリストテレスがその『修辞学』において素晴らしく語っているから、私は場所について少々語ることで満足しよう¹³。

5. 場所について

土地について語る際に考慮しなければならないのは、その土地が北部にあるのか南部にあるのか、東に面しているのか西に面しているのか、平地であるか山がちであるか、風に晒されているかそうではないかといったことである。なんとなればどんな物事においても適切なのは中庸ということであり、それは天地に関しても同様だからに他ならない。北方と南方の、寒地と暖地の中間に住む人間は他に比べ優れた者と評されている。なぜというに彼らは才知と勇気をと

もに備え、支配や統治に向けた性格だからである。かくして我々は大帝国がアッシリア人やメディア人、ペルシア人、キタイ人、トルコ人、ギリシア人、ローマ人、フランク人、スペイン人などかかる民族の手中に握られていたことを知るのである。北方人は一といっても極北においてでない場合であるが一勇気があるがその一方で狡猾さに欠けている。逆に南方人は狡猾であるものの大胆さが彼らには欠けている。北方人はその魂に比例した身体を、即ち長大剛健で血気盛んな身体を有している。逆に南方人とはいえば華奢で痩せこけており、抵抗より逃走に適している。前者は簡潔単純な魂をもち、後者は表裏のある悪意に満ちた習俗に馴染んでいる。前者は獅子の心根をもち、後者は狼の心根をもっている。前者がその行動において遅々としながらも着実であるのに対し、後者は衝動的で軽率である。前者が快活であるのに対し後者は憂鬱性に悩まされている。前者がバッカス〔飲酒〕の支配下にあるのに対し後者はヴィーナス〔性欲〕に支配されている。中部人は両者に関与しているが故に、均衡のとれた抑制された風俗の持ち主であり、狡猾というより思慮深く、凶暴というより剛毅である。このように北方人は力に頼っているため、彼らは今日なおトランシルバニア人やポーランド人、デンマーク人やスウェーデン人がそうするように、共和政かしからずんば彼ら自身の選挙に基づく君主政により支配されている。もっとも昨今では大半の北方人が君主政の支配下に置かれているが、そうなのは彼らの本性が君主政を進んで迎えているからではなく、君主政が多大な利点をもっているが故に、他のあらゆる政体をそこに帰着させてしまっているからでしかない。だが我々はフランス人が王の支配下にあるにもかかわらず、こうした王があたかも彼らの兄弟であるかのようなあり方で、あるいは少なくとも彼らの言葉を借りれば従兄弟が何かであるかのようなあり方で、気楽で愛すべき者であることを望んでいることを知っている。スコットランド

人は今日までに106人の王を有してきた。この数はほとんど信じがたいほどの数である。そして彼らはこれらの王の大半を殺害してきたのだ。イギリス人は彼らが何度も内戦を繰り返したことで、何度も政体を変換したことで、また何度も王権を取り替えたことで知られている。他方南方人は思索に憂き身をやつすその性格故に、宗教や迷信によってたやすく支配されてしまう。占星術が誕生したのがこの地であり、魔術もこの地に源を發し、神官やヨガ行者、ブラフマン、魔術師といった類の者たちが高い権威を与えられているのもこの地である。愚かしい迷信による由無し事や身の毛もよだつように邪悪な法一といえ彼らはそれもまた天に由来すると信じているが一に全面的に基づくサラセン人の支配権もまた、その起源をアラビアの地に有している。その統治下の人民は彼の巡礼者や隠者の衣に惑わされていたが、サラセン帝国のカリフなどという者は¹⁴、今日のモロッコやフェスの王とさして変わるものではなかった¹⁵。我々がブレスター・ジョンと呼ぶところの大ネグス即ちエチオピアの皇帝は¹⁶、足以外の身体を彼らに見せることが無いが故に、その人民から崇拜されている。神の教会を騒がす異端どもについていえば、南方で生じた異端がむしろ思索的ないしは繊細なものである一方、北方の異端がむしろ即物的ないしは粗暴なものであることは、我々もよく見聞きするところである。この地〔南方〕にあつてある者はキリストの神性を、ある者はキリストの人性を、またある者はキリストの両性を、更にまたある者は御言葉からの精霊の流出その他類似の事柄を否定している¹⁷。他方彼の地〔北方〕ではこうした高尚で崇高なことには関心が寄せられず、単に断食や徹夜、痛悔やあるいはその他全ての血液—彼らはそれに充ち満ちている—の増大を禁じる慣習を、あるいはまた司祭の独身制その他類似の事柄を一それが理性と福音書に大いに合致しているのにもかかわらず、彼らを支配する肉と官能に反するが故に一放擲したのであつた¹⁸。彼らは神の代

理人〔教皇〕の權威を否定したが、それは彼らが大胆であるため、自由を際限なく愛するが故のことに他ならない。そこで彼ら北方人は、政治的に共和国のもとでないしは彼らの自由な選抜と恣意の儘になる王の下に統治されていることから、同様に宗教的にも彼らの思いのままになる精神的統治を欲するのである¹⁹。また北方の將軍や兵士は戦争に際して、兵法よりも暴力に頼り、同様に牧師たちはカトリック教徒との論争にあたって理性よりもむしろ悪口雑言を用いるのである。だが中部地方の人間は一北方と南方の中間点に住まいすが故に一柔和な手法によって、換言すれば正義と理性に基づいて統治されており、その結果として彼らは法の創案者、政治の解明者、平和と戦争の技法の達人となった。それに対し南北の極地に、極寒と酷暑の地に住まいする民族は、他の何にも増して獸性に依存しており、そのどちらもその身体は矮小でその習俗には秩序がない。なぜなら極北の人間は寒冷に包み込まれており、極南の人間は猛暑に包まれているからだ。前者は彼らを愚かにする鈍重さに支配されており、後者は彼らをほとんど獸としてしまう憂鬱症に支配されてしまっている。赤道のこちら側に住まいする民族につき私が語ったことは、その彼方の地に住まいする者についても同一の割合で理解されるべき必要がある。東方人は気軽で扱いやすい性格をしており美麗で大柄な身体をしている。他方で西方人は勇猛果敢かつ慎重だ。トスカナ人やジェノヴァ人の如き東南地方の人間は巧妙な才能手腕の持ち主である。反対に西北方に住まいする者たちはより単純明快な心情の持ち主だ。強烈な風に晒されている地域の住民は、その習俗から見て騒々しく落ち着きがない。他方静穏な地域の人々は習俗の穏やかさと堅実さにおいて、彼らの自然の風気に似通っている。山岳民は凶暴野蛮であり、溪谷人は移り気で柔弱だ。痩せた土地では発意と勤勉が開花し、肥えた土地では繊細さや怠惰が幅を利かす。海人は頻繁なる外国人たちとの会話や交渉の故に鋭敏聡明であ

り、交渉事に長けている。他方内陸民は誠実信義を守り、すぐにも喜びする。

6. 熟慮の諸項目について

君主の思慮において利益が他の何物にも勝るものであるということを、しっかり心得おくべきである²⁰。それゆえ君主は彼と関与する者は誰であれ、そこにおいて利益という基盤を持たない場合、友情であれ、血縁関係であれ、同盟であれ、またその他どんな絆であれ信を置くべきではない。

悪習の発端には断固たる態度で立ち向かうべきである。なぜなら悪習は時とともに増大し、力を得てくるからに他ならない。そして悪習の力がそれを防ごうとする貴殿の努力を上回るようになったなら、時間稼ぎをするべきである²¹。というのも時とともに事情が変化していくからである。そして時を稼ぐ者は誰でも命長らえることができるのだ。どんな小さな無秩序をも見逃すべきではない。あらゆる不都合はその発端においては小さなものに過ぎないからだ。だが時とともにそれは成長し荒廃をもたらすこととなる²²。それはあたかも目に見えない水蒸気が次第に恐ろしい暴風雨を産み出していくのと同断である。

重大な事業をいくつも同時に抱え込むべきではない。たくさん抱え込む者は、結局ごく僅かしかその手に留めておくことが出来ないからだ。

既に獲得されたものにしっかり足を留めておくように。ある事業の達成が充分確実なものとなる前に、他の事業に手を出してはならない。従って賢い王にとってこの治世当初なすべきことは、新しい事業を発起することではない。フランソワ1世がロンバルディアにおける事業に着手したことを「その治世の初年、未だ玉座が固まらぬ先から」と語った時アリオストは²³、王を賛美しようとしたにもかかわらず、思わず王の無思慮をくさしてしまったことにあるのである。ナポリ王カルロ3世の太子のラディスラオは²⁴、父の玉座にしっかりと足をかけぬうち

に、その玉座に招聘されたハンガリー王国をわがものにせんものと出かけてしまった。だがザーラに着くやいなや²⁵、ハンガリー人たちが約束を反故にして、ボヘミア王ジギスムントを王位に推戴したという一報を²⁶、そしてまたナポリ王国の豪族どもが反旗を翻したという一報を受けねばならなくなってしまった。

時には時勢に譲歩した大合戦を回避することもまた、賢主に相応しいことである。なぜなら抗し難い暴風雨に対しては、帆を下ろす以上に優れた対策はないからである。この点において卓越していたのがマケドニア王フィリップスである。その治世の当初、数限りない敵が背後に迫っていることを知るや、自身の不利を顧みず彼の国より強大な国々と和約を結ぶ一方、彼の国より脆弱な国々に戦いを仕掛けたのである。このようにして彼は自身の国民の士気を高めた後、敵に対し大胆不敵さを発揮して見せたのであった。ハンガリー王ルードヴィヒとその同盟者たちにより仕掛けられた戦争において²⁷、賢明なる譲歩を行うことによりその利益を確保したヴェネツィア人たちは、フランス王ルイ 12 世とその他の同盟者たちにより彼らに仕掛けられた戦争においては、譲歩を欲しなかったばかりに敗北へと追いやられてしまった²⁸。

賢明な君主にとり何よりも恥ずべきことは、幸運や偶然のなすが儘になることである。この点において皇帝ティベリウスほどしっかりした考えをもった人はいなかった。「ティベリウスは自身が決定を下す際、彼らの議論に惑わされることなく、確固不動の立場を守った。それは本質的なことを無視したからではなく、偶然に頼らないためであった」²⁹。ファビウス・マクシムスその他の古代の武將は言うに及ばず³⁰、当代の武將たちのうちでもプロスペロ・コロナとアルパ公フェルディナント・デ・トレドもまたそうであったが³¹、この点において比類無い人物はスペイン王フェリペに他ならない³²。

突発的な変革を行ってはならない。このような突発的な変革は暴力を伴い、暴力による変革は

滅多に成功しないばかりか、たとえ一時的に成功したにせよ長続きする結果を生み出すことは決してない。王の宮宰であったカール・マルテルはフランスの王位を望みつつも³³、王位を僭称することは望まず、フランス貴族たちに自身を「公」と尊称せしめた。かくしてその子ピピンは王位と王国を容易に入手したのであった³⁴。終身独裁官としての皇帝たちはまず護民官となり、続いて「第一人者」の称を得、最後に大元帥にして絶対的主君となったのである。

何らかの事業を興すべくいったん体制を整えたのなら、その実施までに余り間をおかぬ方がよい。なぜならこの場合、ぐずぐずしていることは計画を掻き乱すことになるばかりだからだ。「遷延は準備の整った者にとり害になるに過ぎない」³⁵。

新しい物より古い物を、騒擾より静穏を選ぶようにすべきである。このことは確実を不確実に、安全を危険に優先させることに他ならない。

誰も彼に敢えて直言したことの無いような、多くの役立つ秘密の事柄を書物の中に見出すようにという、プトレマイオス・フィラデルフィオスに対するデメトリオス・ファレリウスの言葉を思い出すべきであろう³⁶。

よほど多大な有利さにより勝利の確信がない限り、有力な共和国と戦端を開いてはならない。なぜなら自由への愛というものは極めて強烈で、またそれを長年享受してきた人々の心中に深く根づいているものであるから、こうした愛にうち勝つことは大変難しいことであるし、それを根絶やしにすることなどほとんど不可能なことだからである。君主の事業や思慮など彼の死と共に無になってしまうが、自由な諸都市の計画や思案はほとんど死に絶えることがない。

教会と戦端を開くこともまた同様である。なぜならそのような試みが正当化されることは極めて困難であるし、いつでも邪悪なものを見なされてしまい、どんな利益ももたらさないからである。ミラノの諸公やフィレンツェ人たち、ナポリ王やヴェネツィア人たちの事績がこのこ

とを証立てている³⁷。彼らが行った教会との戦争は多大な費用を要したばかりで、どんな利益にもならなかった。というのも教会がその言い分を断念することは決してないからである。たとえある一人の教皇がそれを控えたとしても、別の教皇が登場すれば彼はそれをまた持ち出して来るであろう。

近隣諸国とだらだら戦争を長引かせてはならない。こうした諸国を勇武の国柄に変えてしまうからである。スパルタのアグラシオス王がテーベ人によって負傷した時に彼は、果てしない戦争によって彼が武器の扱い方を教えてしまった民族から、自身に価する報いを受けたのだといわれたものである³⁸。トルコ皇帝はキリスト教諸君主たちに対してこの法則を厳守している。即ち彼はこれらのキリスト教君主の誰とも、だらだらとは戦争を続けないのである。そうではなくてあちらこちらと戦争を仕掛け、これからはある一つの要所の城をとり、あれからはある一つの王国を奪うといった次第なのである。そうした後、これらのキリスト教君主が武器の扱いに習熟する時間を与えぬよう彼らと和約を結び、別の方面へと目を向けるのである。そしてまたここでも彼は同様に、戦争の長期の継続を通じて敵の人民が勇武の質を磨かせないよう、彼らからいくつかの領土や城市を奪取した後、彼らに対して簡単に和平や休戦を申し出る。その結果彼らの兵士たちのみが常に歴戦の強者であり、我らの側の兵士は常に未熟な新参者ということになってしまう。それも彼が常にどこかの国と戦争を繰り返しているのに、我らの側の君主たちの誰一人としてこの国と戦争を続ける者がいないからに他ならない。

その一方で臣下との戦争を続けることは君主にとり適策ではない。その臣下が彼の元来の臣下であれば尚更である。なぜならこのようにして彼らの怒りは益々募り、彼らの心が君主から益々離れ去ってしまうからである。もし当初は彼らの行動が単なる憤怒に過ぎなかったとしても、こうした事例はボヘミアの戦争においてジ

ギズムント王に対して³⁹、またフランドルの戦争においてカトリック王に対して生じたように⁴⁰、時の経過とともにそれは露骨な反逆へと深刻化してしまう。というのもどんな人民でもそもそものはじめから、君主にあからさまにたてつくような人々ではないからだ。反逆や謀反という汚名は彼らに対し悪評や憎悪をもたらしてしまうからである。公正なる取り扱いの覆いや配慮が引き裂かれいったん剣が血塗られてしまえば、全面的な決裂と反乱が待ちかまえている。ユダヤ王アレクサンドロスは6年間にわたりその人民と戦い続け、その間に5万人もの人々が殺害された⁴¹。そしてかかる作戦に果てしがたいことを覚った彼は、とうとう人々に、一体どのようにしたらなにがしかの和平を結ぶことが出来るのかと問いかけた。それに対して彼らはこのように答えたのである。「それは他でもないお前の死によってだけだ」と。[講和の打診という]その当初にしなければならなかったことを、王はその最後にやったのである。

武力に基づかない和平を信じてはならない。非武装の和平は長続きしない。

作戦において奇襲は正面攻撃よりはるかに重大であることを深く心得ねばならない。奇襲は突如として攻撃を加えるが、正面攻撃は概して予見できるものだからである。奇襲は敵を混乱させ、正面攻撃は敵を撃破する。混乱させてから撃破する方が、態勢を整えている者たちを撃破するより容易いことである。

同様に大事業は衝動よりも忍耐によってこそ、よき結果を見るものであることをもよく心得ていなければならない。なぜなら衝動が物事を力づくで行うのに対して、忍耐は抵抗を一挙に挫くのではなく好機を用いて弱めるからである。

事業を手がける好機を知るべく努力しなければならぬ。そしてこの好機を適切につかむ必要がある。なぜなら好機と呼ばれる特定の時点以上に、物事を成し遂げる恰好の契機はないからである。こうした特定の時点こそが好機に他ならない。それは物事の遂行を我々に容易なら

しめる外的諸条件の合流であり、こうした諸条件の合流はこの時点以前でもそれ以後でも、我々にとり得難いものなのである。この点においてマケドニア王フィリポス1世は卓越した人物であった。彼は自分の事業を上手くやりおおせるために、ギリシア諸都市の脆弱さや不和をもの見事に活用してのけた⁴²。このことにつき彼に勝るとも劣らなかつた人物が、トルコ人たちの王ムラト1世である⁴³。彼はその帝国をヨーロッパに拡張するため、ギリシア諸侯の不和を活用したのである。結局のところもしそれらが好機に基づいていなければ、もっといえば好機に導かれなければ、武力も策略も何の価値もないのである⁴⁴。

他の君主に依存している人物を国家の顧問会議に参画させてはならない。他人の利害に関わっているものの意見など、誠実なものであるはずもないからだ。

顧問会議において会議の議決事項に与しない者に事業の遂行を委ねてはならない。知性によって同意されない物事において、意欲が十分であることなどあるはずもないからである。レパントの海戦の際に戦闘に不同意であったオツキアーリは、衝突を回避してしまった。

作戦の着手に当たっては熟慮を重ねるべきである。だが作戦の遂行法については事前の規定を作ってはならない。なぜなら事業の大半は不絶に変幻する時勢の好機に左右されており、計画の実施手段を限定することは、その遂行を掻き乱しそれを妨げるものでしかないからだ。

そこから逃れることにより煩わしさや危険から回避することを考えてはならない。むしろそれに立ち向かいそれを追い払うべきである。なぜならそこから逃れようとしたところで煩わしさや危険はあなたに追い縋って来るものだが、もしそれに真っ向立ち向かうならそれらは自身で後ずさり雲散霧消してしまうからである⁴⁵。

民衆より貴族を最眞にしているとも、貴族より民衆を最眞にしているとも思われることから身を慎まねばならない。というのもこんなやり

方に従うことによって君主は、公平無私な普遍的君主ではなく、単なる一党派の首領に墮してしまふからである⁴⁶。

君主は彼により傷つけられたか、傷つけられたと考えられるような者に信を置いてはならない⁴⁷。というのは復讐欲というものは極めて激しいものであって、ジュリアーノ伯やシャルル・ド・ブルボンの事例が示す通り⁴⁸、その好機が訪れるや忽ち目覚めるものだからである。

君主の御前に控えるその大臣たちは互いに助け合うことが出来るのだから、君主としてはむしろその御前から離れている大臣に配慮すべきである。このような者は通常御前に止まる他の者より一段の出費をし、一段の苦勞を忍んでいるからに他ならない。

多数の意見に反対してはならない。多数の意見にうち勝つことは容易ではないし、それに打ち勝てたところで、それは大衆からの愛情の多大な喪失をその代償とするものとなろう。逆風を味方につける練達の船乗りに倣いなさい。そしてしない訳にはいかないことをすることを余儀なくされているだけだと見せかけなさい⁴⁹。

7. 機密について

和戦の交渉のような重要な折衝を行う者にとって何より重要なのは、機密を保持することである。この機密保持ということは、それが露わとなれば多大な反対を受けるような計画の遂行や事業の管理を容易にする。なぜならもし極秘に行われれば目覚ましい効果を上げる一方、さもなければ利益よりも被害の方が大きくなる坑道爆破と同様に、もしそれが露わとなればそのあらゆる活力や便宜を失ってしまう君主の思案も、それが秘密である間は多大な効果や便宜に恵まれる。なぜなら君主の敵や競争者は彼を引き留めようとしたり、彼に反対しようとするに違いないからである⁵⁰。大変な判断力の持ち主であるコジモ・デ・メディチ大公は⁵¹、機密を以て国家統治の大綱であると評価している。だが物事を極秘にしておく方法とは、それを誰

にも話さないことであり、またこのことがかかる君主をして、物事に関する多大な経験と多大な判断力の持ち主に、つまりは自分で物事を決心できる人間にするのである。アジア王アンディゴノスはまさにそのような人物だったようだ⁵²。かれはその息子ディメトリオスに、彼がいつ軍隊をその野営から出陣させようと考えているかと問われるや否や、「お前だけが出陣ラッパの音に従わねばならないと思っている訳でもあるまい」と。怒り狂って答えたのであった。「マケドニア人」メテルスもそのような人物の一人である。スペインでの戦争において彼の作戦を知ろうとした人物に対し与えた返答は、次のようなものである。「それを知らないことに満足するがいい。もしわしが着ている下着がわしの心中を知っているなら、わしはそれを火中に投げ捨てるどころだ」と、メテルスはこの人物に言ったのだった⁵³。アラゴン王ペドロは教皇マルティヌス4世に、メテルスの場合と同様の返答をした⁵⁴。後にそれによりペドロがフランス人たちからシチリア島を奪取した大軍勢を、彼が何のために準備しているのか、教皇は彼から聞き出そうとしたのである。だがもし君主が自分で物事を決断できるほどの器量に恵まれていない場合、また外交折衝を他人と分担する必要がある場合、それは極秘に少数の者となされねばならない。なぜなら多数の者たちの間では機密は守られ難いからである。機密に与る官吏は通常は顧問官や大使たち、秘書官や間者たちであるのが常であるから、その資質や勤勉において寡黙で用心深い人物を、こうした地位に就けなければならない。「韜晦」することを活用せよ。フランス王ルイ11世は自身の統治術の要諦をそこに求めた⁵⁵。また皇帝ティベリウスは他の何よりもそこにおいて彼が卓越していた、「韜晦」の術によって自身の栄光をかちえたのである。「韜晦」とは自身が既に知っていたり関心を抱いていることを、知らないようにあるいは関心を抱いていないかのように見せかけることを言う。他方「偽装する」とはある物事を他のそ

れのように装うことを言う。怒りの衝動にも増して「韜晦」に反するものはないから、君主たる者しかるべきやり方でこうした衝動を抑えることが適切だ。ここで言うしかるべきやり方とは即ち、自分の内心の思いや親愛の情を、言葉やその他の徴によって表に出さないと言うことである。カラブリア公アルフォンソはフェラータ戦争のためロンバルディアに滞在中、ナポリに帰ったら何人かの者を処罰して、ナポリ王国の政治を再編すると何度も口外してしまった⁵⁶。この言葉は世上に広く流布し、アークウィラと諸豪族の謀反の原因となった⁵⁷。マントヴァの領主パッセリーノはルイージ・ゴンザーガを脅迫することによって、息子共々殺されてしまうこととなった⁵⁸。フォルリのフランチェスコ・ドルソは、自分がジロラーモ・リアーリオ伯の脅威に晒されていることを見て彼に対し恐れを抱き、これをその寝室で殺害してしまった⁵⁹。脅迫というものは反って、脅迫された者にとり相手を害する武器に転じるのである⁶⁰。

8. 思慮について

私は先に思慮と計画について言及したのであるから、君主にとり思慮とは如何なるものであるべきかにつき語ることを逸したくない。

まず第一に君主たるもの狡知ではなく思慮をその専らとせねばならない。思慮とは、目的を達成するため適宜の手段を追求し発見する心の働きである。狡知もまた同様の目的を追求する。だが狡知は思慮と次のような点において異なる。即ち手段の選択において思慮が利益以上に誠実に従っているのに対して、狡知はただ利益だけを勘定に入れているのである⁶¹。

巧妙繊細を極めた思慮を高く評価してはならない。なぜならそのような思慮はたいてい現実には実現しないからである。なんとになれば思慮が巧妙になればなるほど、その実行が精密にならなければ済まないからである。そしてものごとをそこまで秩序正しく遂行することは不可能である。大規模な事業はその遂行のため多数の

手段を伴うものである。その結果それは数限りない想定外の出来事を抱え込むこととなる。それはさながら時計が技巧を凝らして組み立てられていなければならないほど、いっそう容易にその調子を狂わしてしまいがちなようなものである。かくしてこのような精緻な巧妙さに基づく企画や事業は、たいてい雲散霧消してしまうことになる。その一方で、余りに壮麗偉大な企画にも心を動かされてはならない。むしろ容易で確実な企画に目を向けるべきである。なぜなら余りに壮麗偉大な企画は恥辱や損害をもたらすことが普通だからだ。フィリッポス王とクイントゥス・フラミニウスの間に交わされた戦闘におけるマケドニア人戦没者を、度はずれた荣誉と豪華により埋葬した時のアンティオコス大王の事業がそれであった⁶²。それによって彼はマケドニア人たちの感謝を少しもかちとることが出来なかつたし、またフィリッポス王が大王から離反する原因ともなってしまった。ここでリヴィウスは次のように言っている。彼らの虚飾に満ちた性格の故に王たちは、派手派手しい外見でありながら実質の乏しい企画に飛びつきがちであると⁶³。壮麗偉大な企画以上に取り上げてはならないのは、曖昧模糊として余りに広範にわたる計画である。こうした計画に対しては金銭を調達することが出来ないし、人員も精力も不足を来すこととなる。こうした企画は多大な手段を要求するが、我々はそれを揃えてみせることは出来ないのだ。マクシミリアン帝の企画がまさにそのようなものであった⁶⁴。余りに熱意のこもった企画も危険である。こうした企画はその当初においてこそ何となく勇氣凛々と結構なもののように見えるが、事の進行から困難さや煩わしさが浮かび上がってくると、惨めさや絶望に終わってしまうものである。従って確固とし熟考された、偶然性の出来る限り少ない企画が追求されるべきである。この原則は常に遵守されねばならない原則であるが、征服や敵に対する作戦に際しては時に何事かを一危険を賭さない者は何も手にすることが出来ないから

一危険にさらしてもよいし、それが攻撃を企てる者にとり最適のものであるからには、熱狂を示すことも許される。しかし自国を防衛したり征服地を維持するためには、賢主にとり危険を賭すこと以上に不適切なことはない。なぜならそこから予想される利益に比し、予想される損害は遙かに大きいからである。ゆったりとした思慮は大国の君主に相応しいものである。なぜならこうした君主には征服よりも維持が期待されるからである。用意万端怠りなく素早い思慮は、維持よりも拡張を目指す君主に適している。助言の良否の判定はその思惟に負けず劣らずその実践にかかっているから、才華溢れる人物の助言に劣らず実践経験豊かな人物の助言を重んじねばならない。というのもアリストテレスが言うように、学識ある者に劣らぬほどの判断力が経験を積んだ者にはあるからである⁶⁵。だからこそ経験がそれを先立って実証しないなら、新たな創見に信を置いてはならないのである。

9. 新奇ことを行わないことについて

統治において最も慎むべき事は、その蒼古さがその權威の所以となっているような物事を改変しようとする事である。「推奨すべきは古来のやり方を変えない事である。人という者はその実践においてその欠点が明白とならない限り、古来からのやり方を好む者である」とリヴィウスも言っている⁶⁶。この由緒ある物事を取り替えるということは、誰にとっても避けるべき事であるが、なかんずく統治の任にある諸君主にとってはそうである。サムエルによる塗油をうけ王に推挙されサウルが二年間王の座にあった際、彼は宮廷も近衛兵も擁せずさながら一私人のようであった。彼はこのようにして、嫉妬や反抗心を回避しようと目論んだのである。アウグストゥス帝もまたその君主権の新奇さを取り繕うため、皇帝とも王とも呼ばれることを望まず、護民官の称号と職権を以て支配権を確立した。そして自身の法や命令を可能な限り古来の範例に基づいて制定したのである。だがティ

ベリウス帝にも増して古儀を活用した支配者は見出し難い。なぜなら彼は単に著むべき法律や命令のみならず、彼が日毎に導入する奸計や専政をもまた往古の言葉を使って隠蔽し修飾したからである。新奇さは憎悪を伴うものだし、古来の風習の改変は憤怒を引き起こさずには済まない。パルティア王ヴァノネス1世はパルティアにありながらローマ風の生活をしたために、長らくその座にあった王位を逐われてしまった⁶⁷。だがそれ以上に深刻な誤りは、フランス王ルイ11世が犯したそれに他ならない。というのも彼は即位するやいなや、父王により寵用されていた者たち全ての官職や位階を取り上げてしまったからである。既にして彼自身が未だ統治に不慣れであり、職務に必要な知識も経験も欠いていたのであるから、少なくともその側近に物慣れた大臣を引き寄せておかねばならなかったはずである。もし君主もその大臣たちも全く未経験であるとすれば、彼らが新奇な政策に走ることは避けようがない。そしてこうした君主は、ルイ11世自身が証立てたように一再ならず困難に陥ってしまうのだ。もし万一新奇な策を採らねばならない場合、君主は自然に倣って少しずつ、ほとんど気づかれぬようにこれを行わねばならない⁶⁸。自然は冬から夏へ夏から冬へと一足飛びに移行するのではなく、その間に春と秋という穏和な季節を介在させている。そしてこうした二つの季節はその快適さによって極寒から酷暑への、また反対に酷暑から極寒への廻行を我々に、受け入れやすいものとしているのである。「寒冷の候と熱暑の候の間に長い安息の候がなければ、か弱き存在たちはその緊張に絶えることが出来ないであろう。こうした事物は地に対する天の恵みを待望するであろう」⁶⁹。

10. 能力について

人間の能力は思慮と魂の活力より構成されている。こうした二つの物事は一人の人間の中で統合されていて、驚くべきはたらきを産み出し

ている。政権を維持するにあたり精力にも増して重要なのがこの能力というものである。アリストテレスがこのことを、国家を獲得した諸君主の事例をもとに証明している。こうした創業の主は、先祖の力量や精力を受け継ぐ事が出来なかった子孫がそれを容易に喪失してしまうようには、自身の政権を失うことなど滅多に、もっと言えば決してなかったのである⁷⁰。だが我々はここで能力につき、それが熱意によって形成されるものとしてのみ語ることにしよう。熱意はその一部において人間の魂から、またその一部において肉体から、そしてまた一部は外部の力から生じるものである。だが最後の外部の力については、後にしかるべき個所で語るにしよう。ともあれこれらのうち魂に発する熱意が最も主要なものである。魂の熱意はしばしば肉体的疾患を統御し、かかる疾患を補い支えるものであるからである。だがしかし通常から言えば不健康あるいは欠陥をもった肉体は、魂をも打ちひしいでしまう。それゆえ君主は均整のとれた健康で頑健な体格の持ち主であることが望まれる。そして彼はその自然の性を、健康を維持増進する人為の業により補強しなければならない。牛飲暴食を避けることにより肉体の健康は維持される。というのも飲食の悪習は肉体を悪しき気質で満ちし、消化不良を引き起こすからだ。ここから痛風その他の病気が生じてくる。こうした病気は君主の一生を悲惨なものとし、またそれを他の人にとって以上に退屈極まりないものとしてしまう。健康や精力の維持のため節制を心がけなさい。節度のない好色は獣をすら衰弱させてしまう。人間なら尚更だ。そしてまたこうした放埒な好色は老衰や精神の衰弱を早め、神経を困憊せしめ、視力を悪化させ、痛風をひいては死をもたらす契機ともなる。また運動により精力を増進すべきである。その際の運動は次のようなものが相応しい。即ちガレノスに推奨された球戯のように、あるいは狩猟のように四肢全てを目覚めさせるようなものである。また極端な様々な事柄に慣れ親しむこ

とも同様の効果をもつ。即ち寒さや暑さ、徹夜や空腹や渇き、水やワインその他生活と食事に関するあらゆる側面である。なぜならこのようにして人間は健康を確固たるものにし、四肢を鍛え、遂には身体全体を頑健なものにすることにより、人生において遭遇するあらゆる偶発事に容易に対処できるようになるからである。そしてまた君主の職務は多種多彩であるから、どんな出来事も彼にとり全く新奇で困難なものとはならないようその肉体を鍛え上げ、そうした事態に予め準備しておくことが肝要なのである。だが時として本然の虚弱さが、人為のあらゆる助けを打ち負かしてしまうこともある。だからその肉体が如何なるものであろうと、少なくともその魂が活力や熱意やその他なにがしかの生命力に満ちたものであることが必要なのである。こうした生命力は君主をして、彼がそこに直面せざるを得ない困難や危険に立ち向かう覚悟を固めさせるものとなってくれる。また遂には魂の偉大さにより君主は、身体的苦しみをも克服しなければならない。ドイツにおける戦場でのカール五世は我々に、この点につき比類無い範例を示してくれる。皇帝は鎧の上に乗れないほど痛風にもだえ苦しんでいたにもかかわらず、その足を布きれでそこにむすびつけ、極寒のものともせず一冬のあいだ雪と泥濘に塗れつつ、戦場に止まり続けた。彼は身体の重みをその精神力により支え切ったのである。精神を覚醒させ続ける技法は是即ち健康を支え、憂鬱を防ぎ、人間を名誉と栄光へと刺激する手段ともなる。そうした精神覚醒の手段としては、諸君主や大將軍たちの功業について議論することや、皇帝たちやその他数多くの高い脳力を備えた偉人についての学習、思慮と果敢さに溢れた人士についての対話、彼の職務についての完全なる省察などがあげられる。この点に関しては、ヴェスパシアヌス帝の先述した回想が筆者には思い起こされる。彼はその臨終の際に人事不省に陥りながらも「皇帝というものは自身の足で立って死ぬものだ」と言ったのである⁷¹。

注

- 1 ヴェージェツィウス『軍学提要』第一巻・緒言
- 2 マキアヴェッリ『君主論』第14章
- 3 アルフォンソ 10 世は中世カスティリアの国王（在位 1252-84）。学問を愛好し「賢王」（el Sabio）と通称される。イスラム教徒やユダヤ人の文化にも寛容だった彼の時代、その王国の首都がおかれたトレドは、スペインにおける学芸の中心地として繁栄した。スペイン語の定礎者としても名高い。
- 4 シャルル賢王とは中世末期フランスを支配した国王、シャルル 5 世（在位 1364-1380）のこと。ボワティエの戦い（1353）に破れ捕虜となった父ジャン 2 世に代わり、摂政として王国を統治。官僚制や常備軍を整備し、ジャクリーの乱（1358）の鎮圧やイギリス軍の駆逐につき、多大な功績を上げた。他方学芸の愛好者として知られ、「賢王」と呼称される。
- 5 多数の蔵書を有したシャルル 5 世は例えば、アリストテレスの『政治学』やアウグスティヌスの『神国論』のフランス語訳などを下命している。
- 6 アルフォンソ 1 世はルネサンス期のナポリ王（在位 1442-1458）。元来アラゴン王兼シチリア王（アルフォンソ 5 世）であったが、アンジュー家のルネ王を駆逐してナポリ王位を獲得した。「寛大王」（magnanimo）と称された彼の宮廷には多数の文人・芸術家が集い、南部イタリアにおけるルネサンス文明の中心地を形成した。
- 7 行動の鑑としての歴史の有用性については、『君主論』献辞や『ディスコルス』I 緒言を参照のこと。
- 8 同一の政治行動が異なった結果を生んだり、異なった政治行動が同一の結果をもたらしたりするについては、マキアヴェッリ『君主論』第 25 章に詳しい。
- 9 ミトリダテス戦争は前 1 世紀に当時のローマ共和国とポントゥス王ミトリダテスの間に 3 度にわたり行われた戦争。ここでは特にローマの武将・政治家ルクルスが活躍した第三次戦争（前 75-66）を指す。
スルタン
- 10 メフメト 2 世は 15 世紀のオスマン・トルコの君主（在位 1451-1481）。東ローマ帝国の征服（1453）を皮切りに、バルカン版図に広大な領域を獲得し、「征服者」と尊称される。他方古代の歴史を愛好し、第二のアレクサンドロスを自認した彼は、東西の文化に対し幅広い関心を示した。
スルタン
- 11 セリム 1 世はオスマン朝トルコ第 9 代の君主（在位 1512-1520）。ペルシアのサファヴィー朝を破り（1414）、エジプトの 맘ルーク朝を征服（1517）するなど、「征服者」と尊称される祖父メフメト 2 世以上に広大な領土を獲得した。ポッターロニよる彼の古代史愛好の記述には、祖父メフメト 2 世の事績との混同があるようにも思われる。
- 12 ペスカーラ侯フェルディナンド（1489-1525）はイタ

リア戦争期にハプスブルク勢力に立ち活躍した傭兵隊長。その事績はパオロ・ジョーヴィオの『列伝』(Vite)に収録されている。ピッコカの戦い(1522)およびパヴィアの戦い(1525)でフランス・ヴァロア朝軍を相次いで撃破し、勇名をはせた。また対抗宗教改革期イタリアの女流宗教思想家として名高い、ヴィットリア・コロンナの夫でもあった。

- 13 アリストテレス『大道徳学』II-8
- 14 カリフとは預言者マホメットの代理人として、イスラム国家を指導する最高権威者の称号。特にウマイヤ朝およびアッバース朝の君主を指す場合が主であるが、スペインの後ウマイヤ朝やエジプトのファティマ朝においてもカリフ制が行われた。また16世紀オスマン・トルコ朝の君主がアッバース家のカリフ位を継承し、スルタン＝カリフ制による支配を行ったが1924年のオスマン朝廃止と共にカリフ制も終焉を迎えた。
- 15 モロッコとは16世紀初頭から1659年まで同地の大半を支配したサアド朝の王国のこと。他方フェズとは1472年から1554までフェスを首都としてモロッコの一部を支配し、サアド朝に征服されたたフェズ王国(ワッタース朝)のことを指す。
- 16 プレスター・ジョンとは中世キリスト教世界の説話における、東方の伝説的キリスト司祭王のこと。その空想上の支配地は中央アジア、モンゴル、ジンバブエなど時期により転々としたが、15世紀以降専らエチオピアのキリスト教(コプト派)皇帝のこととされるようになった。エチオピア最初の国家阿克苏ム王国の君主はソロモン王とシバの女王の子孫として「諸王の王」(ネグサ・ナガスト)と自称し、4世紀初頭キリスト教を受容した。後にこの王家の子孫を名乗るイクノ・アムラクがソロモン朝を樹立し、エチオピア帝国を建国した。この個所でいう大ネグスとはすなわち、このエチオピア皇帝の尊号としての「諸王の王」(ネグサ・ナガスト)のことに他ならない。
- 17 ここでいう南方の異端のうち、キリストの人性を否定する者の代表が古代末期盛行したグノーシス主義である。中世南仏に栄えたカタリ派もこの流れをくむ。他方キリストの神性を否定する者の代表がアリウス派であり、東ゴート王国などのゲルマン人に広く受け入れられている。キリストの両性を否定する者とは、いわゆるキリスト単性説の信奉者がそれにあたる。「御言葉からの聖霊の流出」を否定する者とは、いわゆるニケア・コンスタンティノーブル信条から filioque (子と共に)の一句を削除し、カトリック教会から離脱したギリシャ正教徒のことであろう。
- 18 上記注18の南方の異端に対して北方の異端が、聖書唯一主義を掲げ教会伝承に基づくこれらの慣習を廃した、ルターに始まるプロテスタント改革であることは言うまでもない。
- 19 ここでいう北方人の共和国とはドイツ国内で自治

を認められた帝国自由都市や、バルト海沿岸のハンザ同盟都市のことを指すものであろう。他方「彼らの自由な選抜と恣意の儘になる王」による統治とは即ち、神聖ローマ帝国やボヘミア、特にポーランドの政治体制となった選挙王政のことと考えられる。他の何にも増して国家の維持とその利益の拡大を重視する政治原理こそ、いわゆる国家理性説の本質である。このような視点はポッテローに先立って、マキアヴェッリ『君主論』第18章、同『ディスコルス』III-40～42に打ち出されている。

- 20 マキアヴェッリ『ディスコルス』I-33,
- 21 マキアヴェッリ『君主論』第3章、第7章、第25章、同『ディスコルス』I-18等に、欠陥の早期の発見の必要とその困難が併せて指摘されている。
- 22 アリオスト『オランダ狂乱』XXXV-44, vv. 1-2
- 23 ナポリ王ラディスラオ1世(在位1386-89、1399-1414)のこと。ハンガリーで暗殺された父カルロ3世(ナポリ王兼ハンガリー王。ハンガリー王としてはカーロイ2世)の跡を受けハンガリー王位を得ようと努めるも、ハンガリー国内の反対勢力のために挫折。他方以前よりナポリ王位をめぐる対立していたアンジュ公ルイ(ナポリ王としてはルイージ2世)に、この間いったんナポリ王位を奪われるも1399年奪還した。
- 24 現在のクロアチア共和国の都市ザダルのこと。長年ヴェネツィア共和国のダルマチア地方における通商基地として西欧と東欧の接点となった。
- 25 神聖ローマ皇帝(在位1410-1437)兼ボヘミア王ジギスムントのこと。カーロイ2世の暗殺後復位したハンガリー女王マリアの夫として、ハンガリー王位(在位1387-1437)についた(ハンガリー王としてはジグモンド)。フス戦争に対する対応を誤り帝国を荒廃させた。
- 26 ハンガリー王ラヨシュ1世(在位1342-1382)のこと。ポーランド王位に加え、一時はイタリアにも進出しナポリ王国を征服したため大王と尊称される。撤退後、復位したナポリ王ジョバンナ1世を殺害し、同族のカルロ3世を王位につけたが、このことが彼の死後その娘マリアとカルロ3世の間のハンガリー王位をめぐる抗争の発端となった。
- 27 ヴェネツィアがローマ教皇ユリウス2世、フランス王ルイ12世、神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン1世ら当時の西欧諸国との間に交わしたカンブレール同盟戦争(1508-1516)のこと。
- 28 タキトゥス『年代記』I-47
- 29 クイントゥス・ファビウス・マクシムス(前275-前203)は、第二次ポエニ戦争時に活躍した古代ローマ共和国の政治家・将軍。強敵ハンニバルに対し、徹底した持久戦術を展開しカルタゴ軍を疲弊させ、戦争勝利の糸口を作った。その持久戦術ゆえにローマ市民からクククタトル(のろま)と蔑称されることもあった。
- 30 プロスペロ・コロンナ(1452-1523)は16世紀イタ

リアで活躍した傭兵隊長。チェリニョーラの戦いやガリリャーノ戦いにおいて、大元帥コルドーバ総指揮のスペイン軍の下で活躍し、スペインのイタリア南部支配の確立に貢献した。他方フェルディナント・ディ・トレド(1507-1582)はカール5世に仕えた政治家・軍人。ネーデルラント総督として同地の新教徒を激しく弾圧した。

³² スペイン帝国の最盛期を築き上げた王フェリペ2世(1527-1598)のこと。

³³ カール・マルテル(686-741)はメロヴィング朝フランク王国の宮宰。王国の実権者としてトゥール・ボワティエ間の戦いでイスラム(ウマイヤ朝)軍を撃破し名声を高めた。

³⁴ カール・マルテルの子ピピン3世(714-768 在位751-768)のこと。メロヴィング朝最後の王キルデリク3世を廃し、自らフランク王位についた。

³⁵ ルカヌス『ファルサロスの戦い』I-281

³⁶ プトレマイオス朝第二代の王プトレマイオス2世(在位前288-前246)のこと。フィラデルフォスはその異名で兄弟愛を意味する。積極的に領土を拡張し、プトレマイオス朝の最大領域を獲得するとともに、首都アレキサンドリアの大図書館に多数の学者を招聘しヘレニズム文化の最盛期を築き上げた。デメトリオス・ファレレウス(前350-前280)はアテネ生まれの雄弁家で、プトレマイオス家に仕えアレキサンドリアで活躍した。

³⁷ 例えばナポリ王ラディスラオ1世(1386-1414)はイタリア全体の支配者となる意図のもと教会国家に侵攻、再三ローマを包囲したが、フィレンツェをはじめとする中部イタリア諸国家の反乱もあり成功しなかった。一方フィレンツェは14世紀後半、教会国家の再建を目指す教皇庁と中部イタリアの覇権をめぐり対立し、八聖人戦争(1375-1378)を惹起している。ヴェネツィアのカトリック教会との対立とは即ち、前記注30にあげたカンブレール同盟戦争をその代表的事例とする。

³⁸ スパルタ王アグラシオス2世(在位前400-前360)のこと。優れた軍事指導者であったが、レウクトラの戦い(前371)でエパミノンドス率いるテーベ軍に敗れ、ギリシアにおける覇権を失った。後にマンテネアアの戦い(前362)で再度テーベ軍とたたかい、宿敵エパミノンドスを戦死させるも、覇権の回復はかなわなかった。

³⁹ 注28参照

⁴⁰ 低地諸国なかんずく北部諸国の市民が、当時の支配者スペイン王フェリペ2世に対して起こした戦争のこと。フェリペ2世はスペイン帝国の世界政策遂行のため、富裕な低地諸国の市民に重税を課したが、このことがその多くがプロテスタント(カルヴァン派)を信奉する彼らに対する弾圧と相まって、同地域の王に対する反乱を引き起こした。

⁴¹ ハスモン朝ユダヤ王国の王ヨナタン(在位前103-前76)のこと。ヘレニズム文化に親しみアレクサ

ンドロス・ヤンナイオスというギリシア名を名乗ったが、逆にこのことが厳格な民族主義を唱えるファリサイ派の反発を招き、彼らと長期にわたる内戦を繰り広げ、敵対者多数を虐殺した。

⁴² 記述の内容から見て東方征服者として名高いアレクサンドロス大王(3世)の父、フィリポス2世(在位前359-前336)の誤りと思われる。彼は少年期を人質としてテーベのエパミノンドスの下で過ごし、ギリシアの戦術を学んだ。長じて即位の後は、ギリシア戦術に改良を加え諸国を圧倒、カイロネアアの戦い(前338)の勝利によりギリシアの覇権を握ったが、側近に暗殺された。

スルタン

⁴³ オスマン朝トルコ第3代君主ムラト1世(在位1360頃-1389)のこと。ビザンツ・セルビア・ブルガリアなど諸国を威圧しつつ、バルカン半島に積極的に進出した。

⁴⁴ マキアヴェッリ『君主論』

⁴⁵ 慎重に事に処するより積極果敢に事態を打開することを重んじる姿勢については、マキアヴェッリ『君主論』第3章、第21章及び第25章を参照。

⁴⁶ マキアヴェッリ『君主論』第19章

⁴⁷ マキアヴェッリ『ディスコルス』III-17。

⁴⁸ シャルル・ド・ブルボンとはフランスの大貴族ブルボン公シャルル3世(1490-1527)のこと。所領の相続問題をめぐり主君たるフランソワ1世と対立し、その宿敵神聖ローマ帝国皇帝カール5世の麾下に転じた。バヴィアの戦い(1525)においてフランソワ1世を捕虜にするなど、多くの武勲をあげたが、皇帝軍によるローマ包囲の最中、敵の銃弾により戦死した。

⁴⁹ マキアヴェッリ『ディスコルス』I-32。

⁵⁰ マキアヴェッリ『君主論』第23章における、皇帝マクシミリアン1世の言動に対する批判を見よ。

⁵¹ 初代トスカナ大公ゴジモ1世(1519-1574)のこと。先代メディチ家当主フィレンツェ公アレッサンドロの地位を傍系から継承、自身の権力を掣肘するグイッチャルディーニらフィレンツェ有力市民を巧みに退け、強力な独裁体制を確立しシエナを征服(1555)、教皇ピウス5世によりトスカナ大公位(1569)を授けられる

⁵² マキアヴェッリ『戦争の技法』第6巻に同様の逸話が記されているが、マキアヴェッリはこのこれをローマの将軍、マルクス・ルキニウス・クラッススの逸話としている。またマキアヴェッリの引用するこの逸話の出典は、フロンティウスの『戦術論』I-1-12である。

⁵³ 同じくマキアヴェッリ『戦争の技法』第6巻の引用(原典はやはりフロンティウス『戦術論』I-1-12である)。

⁵⁴ アラゴン王ペドロ3世(在位1276-1285)はその妃の父が先のシチリア王マンフレディであったことから、かねてよりシチリア王シャルル・ダン

- ジューと対立していたが、「シチリアの晩禱事件」(1282)を契機にシャルル・ダンジューを駆逐しシチリアを制圧した。シャルル・ダンジューを支持する教皇マルティヌス4世(在位1281-1285)は、ペドロを破門したが、そのシチリア王即位を阻止することはできなかった。
- 55 フランス国王ルイ11世(在位1461-1483)は、ブルゴーニュ公国の抑圧など国内大貴族の権力削減に努め、フランス絶対王政の基礎を固めた人物であるが、それにあたり武力よりも権謀術数を駆使した陰謀家として名高い。
- 56 1482-1484にかけてヴェネツィア共和国とフェラーラ公国(エルコレ1世)の間に交わされた戦争。ヴェネツィアのイタリア内陸部(terra ferma)への勢力拡張政策を背景に、ヴェネツィアのフェラーラに対する宗主権の有無や両国間の塩産産をめぐり利害を主要因とする。ヴェネツィアが教会国家(シクトゥス4世)と同盟したのに対して、フェラーラ側にはミラノ、ナポリ、フェレンツェをはじめヴェネツィアの勢力拡大を危惧する多数のむイタリア諸国がついた。フィレンツェのロレンツォ豪華公の仲介のもと「パニョーロの和議」が結ばれ、フェラーラはその独立の維持に成功した。
- 57 従来よりアラゴン系のナポリ王フェルディナンド1世およびその太子アルフォンソの抑圧的政策に不満を抱いていた、カラブリア・パジリカータ地方のアンジュー系諸侯が、サレルノ公アントネッロ2世サンセヴェリーノおよびサモ伯フランチェスコ・コッポラらを指導者に起こした反乱(1485-86)。和議の約束に瞞された彼らは1487年、王の孫娘の婚礼の宴の名目でナポリのヌオーヴォ城に呼び集められ、一網打尽に殺害されてしまった。
- 58 マントヴァとモデナの支配者であったリナルド(パッセリーノ)・ディ・ボオナルコスィ(1278-1328)は有能な武人として名高かったが、ヴェローナ領主キングランデ1世の支援を受けたマントヴァの奉行ルイージ・ゴンザーガ(1268-1360)に殺害された。ルイージ・ゴンザーガはマントヴァの人民軍隊長の地位につき、また神聖ローマ帝国皇帝の代官に任じられることにより、以後18世紀初頭まで続くゴンザーガ家のマントヴァ支配を定礎した。
- 59 フォルリとイーモラの領主ジローモ・リアーリオ伯(1443-1488)は、パッツィ陰謀事件(1478)を機にフィレンツェのメディチ家と対立し、同家の扇動を受けたフランチェスコ(ケッコ)とルドイーコの二人のドルソ家の兄弟により、1488年4月14日にフォルリの都市宮にて殺害された。
- 60 マキアヴェッリ『ディスコルスイ』III-17。
- 61 1590年のローマ版以降、この段落は削除されている。
- 62 ティトゥス・クィンクティウス・フラミヌス(前228-前174)は第二次マケドニア戦争に際しローマ共和国軍を指揮し、キュノスケファライの戦い(前197)においてマケドニアのフィリポス5世の軍を撃破した。続いて彼はギリシアの地に進出したシリア王安ティオコス3世(大王)と対決し、テルモビュライの戦い(前191)でその軍を敗北させて、ローマによるギリシア支配を確立した。ここに語られるフィリポス王のアンティオコス大王からの離反とは、この間の出来事を指すと考えられよう。
- 63 リヴィウス『ローマ建国史』XXXVI-8
- 64 マキアヴェッリ『君主論』第23章。
- 65 アリストテレス『形而上学』I-1
- 66 リヴィウス『ローマ建国史』XXXIV-8
- 67 古代バルティア王国の王ヴァノネス1世(在位6-12)は、ローマで長く人質としての生活を送りヘレニズム的生活様式を身につけていた。即位後このような生活様式を故国に持ち込もうとしたため、伝統的貴族層の反発を買い、アルタバヌス2世(在位10頃-38)を推戴した彼らに追放され、ローマに亡命したのち紀元後19年に殺害された。
- 68 マキアヴェッリ『ディスコルスイ』I-25。
- 69 ヴェルギリウス『農耕詩』II-343-345
- 70 アリストテレス『政治学』III-14
- 71 スエトニウス『皇帝列伝』VIII-24